

「伊豆 歴史散歩」 ～東伊豆編～

静岡県立中央図書館
歴史文化情報センター

「伊豆 歴史散歩」～東伊豆編～

静岡県立中央図書館 歴史文化情報センターのホームページにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

歴史文化情報センターでは、『静岡県史』で収集した所蔵資料や市町村史などを使い、「伊豆 歴史散歩」を作成しました。

「富士山の世界文化遺産登録」や「日本ジオパーク加盟」など静岡県東部地域は県内で注目される観光地です。

その中から、今回は東伊豆を中心に、歴史文化情報センターのオリジナル歴史ガイドを作りました。

まずは、熱海市・伊東市・東伊豆町の東伊豆地域に残る歴史と名所旧跡などをスライドにてご案内いたします。

また、スライドに関係する参考URLを表示しましたので、そこから施設や地図などについての詳しい情報を取得して下さい。

「伊豆 歴史散歩」から、伊豆の新たな発見があれば幸いです。

「伊豆 歴史散歩」 ～東伊豆編～ 掲載内容

【熱海市】

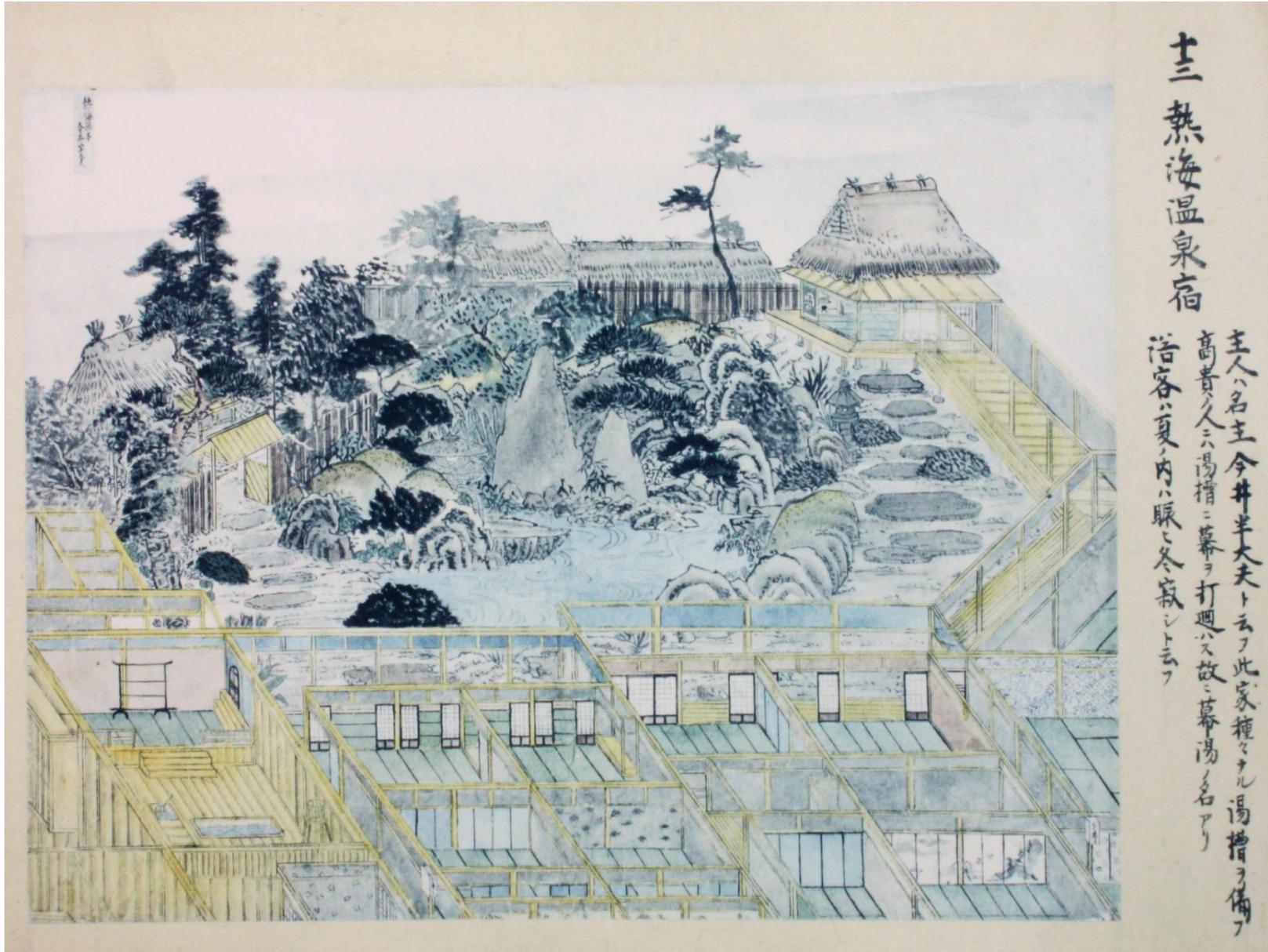
- No.4 「江戸 天保期頃の熱海温泉宿」
- No.5 木村喜繁筆「今井半太夫の湯店(ゆだな)と一碧(いっぺき)楼」
- No.6 源頼朝 北条政子ゆかりの「伊豆山神社」
- No.7 静岡県指定文化財「銅造走湯権現立像」
- No.8 熱海七湯「大湯」(間歇泉)現在の噴出
- No.9 「初代イギリス公使オールコック滞在記念碑と愛犬トビーの墓」
- No.10 本州一の巨樹「来宮(きのみや)神社の大楠」

【伊東市】

- No.11 頼朝の監視役「伝 伊東祐親(すけちか)墓」
- No.12 日本初の洋式帆船建造「三浦按針(ウィリアム＝アダムス)胸像」
- No.13 江戸城築城石「宇佐美に残る刻印石」
- No.14 文明開化期の思想家「中村敬宇(正直)顕彰碑」
- No.15 伊東の生んだ天才「木下杢太郎(もくたろう)」

【東伊豆町】

- No.16 江戸城築城石「稲取に残る豊石」
- No.17 道祖神「伝 八百比丘尼(やおびくに)石像」
- No.18 重陽(ちょうよう)の節句 「ハンマーサマ」
- No.19 上巳(じょうし)の節句 「雛のつるし飾り」
- No.20 初代稲取村長「田村又吉翁頌徳(しょうとく)碑」



十三 熱海温泉宿

主人ハ名主今井半大夫ト云フ此家種々ナル湯槽ヲ備フ
高貴久人ニ湯槽ニ幕ヲ打廻ハス故ニ幕湯ノ名アリ
浴客ハ夏ノ内ハ賑ヒ冬寂シト云フ

木村喜繁筆 「今井半太夫の湯店(ゆだな)と一碧(いっぺき)楼」

静岡県立中央図書館所蔵

- 幕府浜奉行であった木村喜繁が、天保3(1832)年に伊豆を視察した時の紀行文画帳『伊豆紀行』に、この「熱海温泉宿」が掲載されています。この資料は、「静岡県立中央図書館 ふじのくにアーカイブ」内「絵図・古地図」の「九十五年前の伊豆」(天保3年)でも御覧いただけます。

[「ふじのくにアーカイブ」リンク先:静岡県立中央図書館ホームページ](#)

- 【絵図にある文字】

十三 熱海温泉宿

主人ハ名主 今井半太夫(はんだゆう)ト云フ 此(この)家種々ナル湯槽ヲ備フ

高貴ノ人ニハ 湯槽ニ幕ヲ打廻(うちま)ハス 故ニ幕湯ノ名アリ

浴客ハ夏ノ内ハ賑ヒ 冬寂シト云フ

- 一碧楼は、熱海本陣を務めた今井氏湯店の別亭です。当時、これらの別亭や離れは茶人むきに数寄を凝らした上、素晴らしい熱海の眺望をほしいままにできるよう造られていました。幕末に滞在したイギリス公使オールコックは、今井半太夫の湯店を次のように紹介しています。
- 「6つの広々とした浴室が一行に並び、典型的な日本式庭園に面した大きな一連の部屋がある。右手の広い階段からは、美しい海の景色を見渡せるバルコニーのついた2階の2つの部屋(一碧楼)に行けた」とあります。オールコックは持参した洋物の家具を置き居心地の良い部屋に変えて滞在したようです。
- 「豆州熱海湯治道知辺(とうしゅうあたみとうじみちしるべ)」によれば、入湯は一回りを7日間とし、三回り21日間が適当とされました。一回りで病根をあらわし、二回りで湯の力が病根を屈伏させ、最後の一回りで体力を回復させるという古来からの入浴健康法です。当時も心身の癒しを求めて多くの人々が訪れ、熱海は湯治場として大いに賑わいました。

源頼朝 北条政子ゆかりの「伊豆山神社」 歴史文化情報センター資料



- 伊豆山は、伊豆の国号発祥の地（湯出＝ゆいづ）と言われ、走るが如き温泉が湧き出し、海に注いでいたので走湯山（そうとうざん）とも呼ばれていました。
- 修験道（しゅげんどう）の祖、役（えん）の小角（おづぬ）が伊豆へ流されここで修業してから神仏習合の伊豆山権現として信仰が広まりました。
- 平安時代末、北条政子が平家方の山木兼隆（かねたか）と婚礼の夜、伊豆山にいる源頼朝のもとに走ったというロマンスは広く知られており、二人の縁を結んだ事でも知られています。
- 境内にナギの木があり、葉脈が並行して切れにくいということから、男女の縁につながり、葉の裏に想う相手の名を書いて枝に結ぶと、恋が遂げられるという言い伝えが残ります。現在でも縁結びの神様として人気を誇ります。
- [「リンク先:伊豆山神社ホームページ」](#)

静岡県指定文化財「銅造走湯権現立像」 伊豆山神社所蔵



- 伊豆山神社は、三嶋大社、箱根神社と共に武士や庶民の厚い尊崇を受け、特に武家政権を担当した源頼朝公、徳川家康公の保護を受け、大いに発展を遂げました。
- 権現(ごんげん)とは仏様が民衆を救うため仮に神様になってあらわれたものをいいます。その一例として、徳川家康公の東照権現は良く知られています。
- この御神像は、伊豆山神社の西隣にある般若院(ほんにゃいん)伊豆山権現立像(重要文化財、東京国立博物館蔵)に似ていますが、顔立ちや衣服などの作風に若干の相違がみられます。
- 像高は96cm・重量は110.5kg、国内最大級の大きさを誇る青銅製の御神像です。
- 面相は福々しく柔和で、立烏帽子(たてえぼし)をかぶり、袍(ほう)に袴(はかま)そして袈裟(けさ)をかけた姿は、七福神の恵比寿様にも似ています。また、背面には「本宮走湯権現神体」の刻印があります。
- 伊豆山経塚遺物、木造宝冠阿弥陀如来像等とともに、伊豆山郷土資料館で展示・公開されています。
- [「伊豆山郷土資料館 リンク先:熱海市ホームページ」](#)

熱海七湯「大湯」(間歇泉)現在の噴出 歴史文化情報センター資料



- 昔は熱海「六湯」と言われ、そのひとつ「大湯」は、世界三大間歇泉(かんけつせん)としても有名でした。
- 関東大震災前までは、昼夜6度にわたり湯と蒸気を交互に激しい勢いで噴出し地面が揺れるようであったと伝えられます。
- 江戸時代後期の人気作家であった山東京伝(さんとう きょうでん)は熱海に来湯し、この大湯間歇泉を見て、「石竜熱湯を吐くが如く、湯気雲の如く昇り、泉声(せんせい)雷の如し、本朝第一の名湯なり」と著しています。
- この大湯から地中を木樋で引いた湯店(ゆだな)27軒が分湯権を持ち、熱海温泉の草分けとして格式を誇り、湯戸(ゆこ)として徳川将軍家に湯を献上する「汲湯(くみゆ)を行いました。
- 「大湯」は昭和37年の復活工事に成功し現在では、人工的に噴出しています。
- [「熱海七湯めぐり リンク先:熱海市ホームページ」](#)

「初代イギリス公使オールコックの滞在記念碑と愛犬トビーの墓」

歴史文化情報センター資料



- 万延元(1860)年9月13日、初代イギリス公使ラザフォード＝オールコックは、富士登山の帰りに熱海温泉を訪れました。この時の護衛は、韮山代官であった江川太郎左衛門が務めました。
- オールコックは、宿泊施設の様子を『大君の都』に著わしています。本陣・今井半太夫の湯店について、「主要な浴場施設は大名とその家族用のものであったが、設備の点でわれわれが予期したよりはるかに優れているのに驚き、かつ喜んだ」とあります。
- オールコックは約2週間の湯治目的で熱海に滞在しましたが、この時愛犬スコティッシュテリアのトビーが、間歇泉の熱湯で大やけどを負い死んでしまいました。
- オールコックはたいへん悲しみましたが、地元熱海の人々が大勢集まり、手厚く葬ってくれたことに感激し、それまでの「日本人は敵だ」という日本人観を変えたといわれます。凶の石碑2柱は、後にイギリス軍艦により熱海に届けられました。
- トビー墓碑銘「Poor Toby 23 sep 1860」
- 「オールコックの碑と愛犬の墓 [リンク先: 静岡県文化・観光部文化政策課 ふじのくに文化資源データベース](#)」

本州一の巨樹「来宮(きのみや)神社の大楠」 歴史文化情報センター資料



- 神社縁起によると、大国主命(おおくにぬしのみこと)が諸神を率いて海を渡り熱海海岸に上陸しました。「この地は温泉に恵まれ気候風土がよくまた、物資も豊富なのでここに居を定めた」と伝えられ、その跡が来宮神社であるという伝承が残っています。
- 来宮神社は江戸時代末まで「木宮神社」と称し、古来より日本人の生活文化に欠くことのできない「木」に感謝する信仰を持ち、人々の崇敬を集めました。
- 境内の御神木である大楠(クス)は樹齢2千年、周囲23.9m、高さ20mで本州一の巨樹とされます。根は深く大地に食い込み、巨石を抱きかかえ、幹のこぶは石のようになり、生命力に満ち溢れた姿はご覧のとおりです。
- 幹を1周廻ると寿命が1年延命する心に願いを秘めながら1周すると願い事が叶うという言い伝えがあります。
- [「リンク先: 来宮神社ホームページ」](#)



- 伊東祐親は、伊東・河津に領地を持つ平家方の武将です。平安時代末期伊豆に流罪となった源頼朝の監視役となりました。
- 京都大番役(朝廷の警備)で領地の伊東から離れている間、娘の八重姫が頼朝との間に千鶴丸(せんづるまる)を産みました。祐親は平家の怒りを恐れ、千鶴丸を松川の淵に沈めて殺してしまい頼朝と八重姫の恋は終わりを告げます。
- 頼朝が平家打倒の兵を挙げると、大庭景親(かげちか)とともに平家方として戦い、石橋山の戦いでは頼朝軍を敗走させます。その後、富士川の戦い直前に源氏方に捕えられ、2年後に娘婿の三浦義澄(よしずみ)の邸内で自害しました。現在、伊東市役所近くの物見塚公園に騎馬武者姿の祐親銅像があります。
- 「伝 伊東祐親の墓所 [リンク先:ハローナビしずおか](#)」

日本初の洋式帆船建造 「三浦按針(ウイリアム・アダムス)胸像」

歴史文化情報センター資料



- ウイリアム・アダムスは、慶長5（1600）年リーフデ号航海士として、豊後（ぶんご＝大分県臼杵市）に漂着しました。徳川家康とは大坂城で謁見し、外交顧問となり、幾何学・地理学・造船学なども教授しました。
- アダムスは、伊東市松川河口で洋式帆船2隻を建造しました。その1隻、サン・ブエナ・ベンツラ号（幸せを運ぶ船）は、上総（かずさ）に漂着したスペイン人フィリピン前総督ドン・ロドリゴがメキシコに帰国する際に使用されました。
- スペイン国王フェリペ3世は、家康の厚誼に対し、答礼使としてセバステアン・ビスカイノを送りました。その時届けられた贈り物の中に、久能山東照宮が所蔵する有名な「家康公の洋時計」が含まれていました。
- ウイリアム・アダムスは、相模国三浦郡逸見（へみ）村に領地250石、また日本橋に邸宅を与えられ、三浦按針と呼ばれました。日本人を妻とし、子どものジョセフも朱印船貿易家として活躍しました。
- ウイリアム・アダムスは元和6（1620）年平戸で病没しました。現在、アダムス夫妻を祀る按針塚が横須賀市逸見町に残っています。
- 「[三浦按針の足跡](#) リンク先:伊東観光協会」



- 徳川幕府は成立直後から、外様大名の経済力を低下させるため、江戸城築城工事を課しました。それに伴う石垣工事も、慶長10(1605)年から始まりました。
- 原料となる築城石は、石高10万石につき百人持(人夫100人で運搬できる)の石1,120個が割り当てられ、相模の真鶴から東伊豆稲取までの海岸線で切り出され、3,000艘以上の船で江戸へ運ばれました。
- 図の築城石は、伊予国(愛媛県)松山城主松平隠岐守(おきのかみ)定之の刻印です。○の中に、漢数字の一と十が記されています。なお、「くさびあと」を見易くするため、上下を逆さまにして置かれています。
- 宇佐美の地名のひとつ「御石ヶ沢(おいしがさわ)」は石丁場遺跡の名残を示すものであり、現在でも、宇佐美の山や海岸には運びきれなかった各藩の刻印のついた石が残っています。
- 宇佐美初津(はづ)の旧家には、当時黒田家から派遣された豪傑後藤又兵衛基次の感謝状が残っています。
- 所在地:宇佐美駅より海岸へ徒歩2分



- 中村敬宇(本名正直)は、明治初期の啓蒙思想家として有名です。
- 正直の父、佃武兵衛の出身が伊東市宇佐美ということから、正直没後80年の昭和46(1971)年、地元の有志の手により顕彰碑が建立されました。
- 碑文は、「西国立志編」巻頭の「天ハ自ら助クルモノヲ助ク」であり、書を川端康成、碑の設計と碑面にはめ込まれたブロンズ像の制作は澤田政廣という伊豆に関係する著名人の手によるものです。
- 明治4(1871)年、静岡学問所で訳述出版された「西国立志編」は、「個人の理想は、貴賤にかかわらず自立して労苦忍耐の力で成功、しあわせを得ることにある」と説いています。当時、福沢諭吉の「学問のすゝめ」と双璧の大ベストセラーとなりました。
- 所在地:伊東市宇佐美仲川河口
- [10「尚学」の碑\(富春院\)～明治期の啓蒙思想家中村正直と静岡～](#) [リンク先歴史文化情報センター 幕末・明治初期の文化財紹介](#)

伊東の生んだ天才「木下杢太郎(もくたろう)」 伊東市立木下杢太郎記念館所蔵



- 木下杢太郎(本名太田正雄)は、伊東市湯川出身。東京帝国大学医学部を卒業後ソルボンヌ大学やパスツール研究所などで皮膚学を研究し、昭和16年にはフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与された著名な医学者です。
- 一方、文学熱も旺盛で、「明星」に参加し与謝野寛・晶子や北原白秋とも親交がありました。また、石川啄木を編集人とした『昴』(すばる)の執筆人となり、文学的才能を大きく開花させます。
- 画才も豊かで、『百花譜』(ひゃくかふ)は昭和18年3月から20年7月の死の直前まで描き続けた植物画集です。
- 杢太郎の生家である「米惣」(こめそう)は昭和60年に生誕100年を記念して、木下杢太郎記念館として開館され、興味深い遺品を展示しています。
- [「市立杢太郎記念館 リンク先:伊東観光協会」](#)

江戸城築城石「稲取に残る畳石」

歴史文化情報センター資料



- 東伊豆町では、江戸時代初期江戸城築城のための石材が多く運び出され、採石丁場跡や運び出された築城石を町内各所で見ることができます。
- 伊豆稲取駅から東へ約500mの栗田家門口の両脇には、「畳石」とよばれる東伊豆町最大規模の築城石が置かれています。
- この2つの築城石には、「御進上松平土佐守」の文字があり、土佐2代藩主の山内忠義(ただよし)により、東伊豆町の土佐藩採石丁場から運び出された築城石であることがわかります。
- 代表的な築城石は、大川地区の「ぼなき石」、熱川地区の「大湯角石(すみいし)」などがあります。
- [「東伊豆町の歴史 リンク先: 東伊豆町ホームページ」](#)



- 道祖神とは、道境の神の総称であり、旅の安全を守護する神、外からの疫病などの侵入を防ぐ神として信仰されています。
- 図は「八百比丘尼」の石像と伝えられます。「やおびくに」とは、人魚の肉を食べ、不老不死となった今も残る少女の伝説です。
- 稲取に残るこの石像は、柳田国男の高弟である折口信夫(おりくちしのぶ)博士の代表的な著書『古代研究』国文学編の巻頭写真として掲載されています。
- 折口博士は、この石像が女性の姿をしており、手に持っている花が椿であることからこの石像を不老不死の苦しみから椿を手にして各地を回ったという八百比丘尼の石像としました。
- 現在では風化しているため、御覧のように椿などの判別はできません。「稲取漁港八百比丘尼公園」内に安置されています。
- [「八百比丘尼の石像 リンク先:静岡県文化・観光部文化政策課 ふじのくに文化資源データベース」](#)

重陽(ちょうよう)の節句「ハンマーサマ」 歴史文化情報センター資料



- 東伊豆町稲取地区では、9月9日の重陽の節句に、ハマオモト(浜木綿)の葉などで、武士・イカ・サンマを作り「イカとサンマになってきてくらしえー」と唱えて、泣き真似をしながら海に流す「ハンマーサマ」という行事が行われています。
- その昔、不漁の年に魚の大群めがけて鳥が集まる「鳥やま」が沖に見えたので船を出すと、そこには戦いに敗れた7人の武士の死体があり、漁師たちはその死体を手厚く葬りました。
- その後、稲取ではイカとサンマが多く獲れるようになり、漁師に大漁をもたらす神として稲取岬の竜宮神社に石塔を祀り、この行事が行われるようになりました。
- 2002(平成14)年には、「国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に指定されました。

上巳(じょうし)の節句「雛のつるし飾り」

歴史文化情報センター資料



- 東伊豆町稲取地区では、3月3日の上巳の節句に、雛壇の横に雛のつるし飾りと呼ばれる手縫いの人形をつりさげて飾り、子どもの成長や幸せを願う風習が残っています。
- つるし飾りの人形は、邪気を退治して長寿を意味する「桃」、災厄が去ることを願う「さる」、健やかな成長を祈る「はい子」など約40種類です。
- 子や孫の成長を願う優しい温かい心をこめた稲取独自の風習で、女の子の健やかな成長を願い、祖母や母が着物の端切で手作ります。
- 九州柳川地区の「さげもん」、山形酒田地区の「傘福」と並ぶ、日本三大つるし飾りに数えられています。
- [「雛のつるし飾り」リンク先:稲取温泉旅館協同組合公式サイト](#)

初代稲取村長「田村又吉翁頌徳(しょうとく)碑」 歴史文化情報センター資料



- 田村又吉は、天保13(1842)年稲取に誕生しました。稲取村の初代村長となり報徳精神を基礎に、その手腕を発揮して寒村であった稲取村を全国でも三つの指に入る、模範村に変える事に成功します。
- 成功の第1は、みかんの栽培を広めたことです。全国各地を視察してみかん栽培に着目、村に帰るや青年たちを指導してみかん作りを始めました。明治30年代には東京神田の「万直商店」で販売されこれが本町みかんの始まりとなりました。
- 第2は、天草＝石花菜(てんぐさ)の振興です。又吉はそれまでの乾燥方法を改良し大きな利益をあげました。天草とみかんは、現在でも東伊豆町の特産品として人気があります。
- これらの利益で、地方自治の改善や教育社会事業の啓発、林産業の確立、道路や水道の建設などを行い、明治37年には藍綬(らんじゅ)褒章を授与されました。
- 大正元(1912)年、講演先の群馬県に向う途中、天城山中で倒れ不帰の人となりました。現在、稲取中学校には又吉翁の胸像があり稲取の町を見守っています。
- 「東伊豆町の歴史 [リンク先: 東伊豆町ホームページ](#)」